

札幌国際大学 招へい教員 教育研究活動実績報告書

氏 名	李 艶
国 籍	中国
招 へ い 期 間	2020年9月16日—2021年9月15日
派 遣 機 関	深圳職業技術学院
本学の所属・職位	観光学部国際観光学科
教育研究実績	
<p>コロナで来日が遅れ、在日期间が8ヶ月未満で帰国してしまい、大変残念であるが、皆様のご支持のもとで、限られた時間を最大限利用し、以下の5つの面で、一定の実績を挙げることができたと言えよう。</p>	
<p><u>一、授業の担当</u></p>	
<p>2020年秋学期は週に4コマ、2021年春学期は週に5コマの授業を担当した。一人の教員にとって、授業を担当することで得た収穫が一番大事である。</p>	
<p>(一) 留学生を対象とする日本語の授業に関して</p>	
<p>二学期に渡り日本語の授業を担当することにより、日本語教師としての経験を大いに積むことができた。また、札幌国際大学ではどのような日本語教育がどのように行われているか、ある程度認識することもでき、いい勉強にもなった。以下のようにまとめてみる。</p>	
<p>1、クラス分けが細かい。</p>	
<p>在学中の留学生の日本語におけるレベルを、半年毎に、Jcat という日本語試験で取った点数を主に、学生の具体的な個人状況も合わせ、「日本語Ⅰ」～「日本語Ⅵ」と六つの段階に分け、学生の実際の日本語力に適合した授業を進めている。</p>	
<p>2、各段階の到達目標が適切で具体的。</p>	
<p>「日本語Ⅰ」～「日本語Ⅵ」の各段階に、それぞれ違う到達目標が設定されている。また、同じ段階でも、クラスにより、学習内容と到達目標が違うこともある。例えば、春学期における「日本語Ⅴ」に対し、2つのクラスが設けられ、それぞれビジネス日本語と読解・会話トレーニングを中心に授業が進められた。タイトルが同じでも、授業内容、到達目標を多様化にすることにより、特に上級レベルの学生の多様なニーズを満たすことができ、卒業後の就職や大学院への進学にも、非常に役立ち、きめ細かい対応だと思った。また、そういうことができるというのは、日本語の授業の内容と形式を多様化にすることができる教員が揃っているということにもなるので、それについても感心している。その上、一</p>	

つのクラスに入る学生も、細かいクラス分けにより少人数なので、教員が丁寧に指導することも可能で、そこが一番羨ましい所である。

3、指導が丁寧である。

他の先生が担当する日本語の授業を受講し、また日本語部会の会議に出ることを通し、先生方、職員の方々が留学生にいつも温かく接している印象を受けた。なお、日本語部会と国際課が共有する申し送り表が作っており、日本語の授業が終わった後、日本語教員が全員、当該授業の状況、学生の様子を毎回記入することになっている。それで学生の近況が関係教員、職員全員に分かり、迅速に適切にフォローすることができるため、非常にいい方法だと思う。

4、日本語部会での交流。

二学期に渡り、オンラインで数回日本語部会の会議に参加し、日本語の先生方と授業、課題、試験の進め方等を確認し、討論しあったお陰で、日本語教師としていい経験ができた。中国で長年日本語を教えてきたが、日本の大学での日本語教育と違う所が結構あるので、それを常に感じ、対照し、それで勉強になった部分が多い。また、留学生に関する情報を国際課と共有し、問題解決へ向け検討しているうちに、留学生への接し方を改めて認識し、職員の方々との交流もある程度できた。

(二) 中国語母語話者以外の学生を対象とする中国語の授業に関して

春学期は「中国語Ⅰ」の授業を二クラス担当させていただき、日本語で中国語を教えることにより、自分自身の日本語力の向上を初め、多方面でいい経験ができたと言える。学生のお大半は日本人で、タイ、ベトナムからの留学生も何人かいた。この科目を選んでくれた学生たちの熱意にこたえるように、授業の準備を念入りにしていた。また、中国のことをもっと知ってもらうために、授業中コラムの時間も設け、少しながら紹介してみた。教え方、進め方などについて、同じ中国語を教える杉江先生や高先生に相談に乗っていただき、授業公開期間中も杉江先生の授業を見学した。中国語教授の経験が浅く、また大半はオンライン授業で、学生との交流も限られたため、うまくできなかった部分もきっと少なくないが、悔いが残らないように頑張った。

(三) オンライン授業におけるスキルの習得

中国の大学では2020年の春学期だけオンライン授業が行われ、期間が短いため、オンライン授業で使われるプラットフォームやソフトが日本のように統一していなかった。また、向こうでは中国企業が開発した物が使われているので、2020年秋学期まではzoomやformsを使ったことがなかった。この一年間の教授により、zoomやformsだけでなく、2021年春学期から導入されたmanaba、responも積極的に使い、学生に通知を出し、資料を配布し、課題を提出させ、小テストを受けさせてきたお陰で、使い方を習得することができた。

これも一つの収穫だと言えよう。

(四) 授業公開への参加と見学

授業公開期間中、一回分の授業を公開し、レッスンプラン等を提出した。また、授業公開をチャンスに、何名かの先生の授業を見学することができた。自分の担当、専門と関係がある日本語、中国語の授業を見学することにより、他の先生の教え方を見習うことができ、いい勉強になった。それに、全く専門知識を持っていない観光の授業も見学し、北海道という世界でも有名な観光地を背景に、札幌国際大学にある観光学部がさすがに日本全国で二番目に歴史が長い学部だと、改めて認識することができ、感心している。

二、留学生へのサポート

交換教員として招聘していただき、来日すること自体は国際交流の一環だと認識している。来日する前にも、国際課、国際センターを初め、大学の各部門、各学部が留学生を有力にサポートしていることを知っていたが、この7ヶ月を通し、そのサポートがどのように行われているか、どれだけ行き届いているか、身近で見ることができ、感心した。

勉強の面において、大学の方々は留学生に対し、履修から、授業の出席、課題の提出、試験の受験、単位の取得まで細かくフォローし、温かく励ましている。生活の面においても、アルバイトや引越しなど各種の相談に乗り、熱心に指導している。また、コロナの中でも、スピーチコンテストや、食料品を配る生活支援など、多数のイベントを開催していた。協定校の者としては、安心して学生を推薦できる大学だと改めて感じられた。

私も皆様を見習い、こちらに編入学している当校の卒業生や、日本語と中国語の授業で出会った留学生たちをできるだけサポートするように頑張った。それこそ、交換教員の役目でもあると認識している。

三、大学全体への認識

月に一回教授会に参加することにより、大学における通常業務が教務部、学生部、アドミッション、キャリア支援センターと四つの部門を通し、学部、学科、教員まで通知され、具体的にどのように進められるか、少しずつ分かるようになった。聞き取れない部分や、聞き取れても事情が分からないため、すぐ理解できない部分もあったが、学部会議、学科会議でまた取り上げられることにより、理解できるようになった。

FDには合計3回参加し、学生の休学、退学、就職、新カリキュラム等について、毎回主題が違い、それに出席することにより、大学の運営理念、方針、改革などを少しずつ認識できるようになった。

その中で、学生の休学、退学に対する慎重さ、指導の丁寧さ、学生の就職に対する重要視、新たに採用した教員の経歴、経験の豊富さ、専任教員の学外での活躍などが非常に印象的だった。

四、観光学部での行事参加

(一) 学部会議、学科会議への出席

月に一回観光学部の学部会議、国際観光学科の学科会議に出席することにより、大学の通常業務が観光学部で具体的にどのように執行されるか、同席の先生方の連絡、報告、質問、討論により詳しく分かるようになり、いい交流もできた。また、自分の勤務内容と関係がある部分はしっかり確認し、不確定な点がある場合、ほかの先生に聞き、議事録を読むことにより解決し、事前に準備ができた。

(二) イベントへの参加

観光学部の一員として、卒業式、入学式、オープンキャンパスに参加し、日本の大学における学内行事は事前にどう準備されるか、当日にどう開催されるか、実際の参加で、その形式、流れ、内容等が分かり、いい勉強になった。また、参加することにより、大学全体のことを更に知ることができ、先生方、職員の方々との交流も、コロナで制限されながら、ある程度できた。その中の7月31日のオープンキャンパスで、杉江先生のアシスタントとして中国語の模擬授業をすることができ、大変勉強になり、いい経験、いい思い出にもなった。

また、観光学部の活動参加を通し、先生方が多忙であることが認識でき、感心している。授業のコマ数も多く、ゼミや、学生のアドバイザー、四部の窓口等も担当しているが、みな積極的に、協力的に、明るく働いているのを見て、自分も励まされているように思えた。

五、受講と個人の研究

以上のほか、国際センター長の沢田先生が事前に掛け合ってください、授業がない時間帯を利用し、「日本事情」、「日本語表現」、「日本語研究一文法と語彙」、「日本語研究一音声」、「日本文化演習（茶道）」を担当される先生方の承諾をいただき、受講することができた。

日本社会の各方面をテーマにする「日本事情」と、日本語でレポートを書く方法を教える「日本語表現」は、内容が直接に中国の大学にある日本語科の科目と関係し、多方面で参照にすることができると言えよう。また、日本語の語彙、文法、音声の専門知識を中心とする「日本語研究」は日本語科の科目に関わるだけでなく、日本語教師の私の個人研究分野にも大いに関わるので、受講により大変勉強になった。なお、茶道の入門作法を教える「日本文化演習」は中国の大学になかなかない実技科目なので、受講により、相関知識を深め、視野を広めることができた。以上の5つの授業を受講できたことが、日本語教師の私にとって大変有用で有利なので、近い将来の論文作成及び発表にもぜひ繋げていきたいと考えている。

六、謝辞

在日期间が一年未満という時間上の制限があり、またコロナ禍がまだ終息していなく、それでキャンセルされた行事が多かったため、挙げられる実績が限られているが、できる

限りのことは頑張ってきました。時間が許せば、日本語や日本文化、日本社会に関する授業を更に多く受講し、図書館を更に多く利用し、交換期間内に論文を発表し、一番の成果として挙げられたらと残念に思っております。一方、ご招聘いただき、コロナの中でも交換教員として来日し、授業を担当し、イベントに参加し、教職員の皆様と一定の交流ができたことを深く感謝しております。今回の経験をぜひ貴大学との国際交流に関する事に生かし、両大学の合作を更に深めようと、引き続き頑張っていきたいと存じます。

大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

末永くよろしく願いいたします。